

スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* (Butler)

【選定理由】

愛知県では、1951年に北設楽郡豊根村茶臼山で初めて記録された。その後、三河山間部から若干の報告があったが、公式な記録が途絶えていた。近年になり豊根村茶臼山付近にも生息していることが確認された。環境悪化に伴い近年は急速に個体数を減じている。近隣の岐阜県においても、近年急速に個体数が減少しており、この傾向は全国的である。2018年以降継続調査を行っているにも関わらず確認されていない。

【形態】

前翅長 12mm 前後。翅の表は黒褐色に橙色の斑紋が広がる。裏は一様に黄橙色で、翅脈上に黒条が目立つ。♀は前翅の基部と中室外方に暗褐色紋をもち♂との区別は容易であるが、近似種ヘリグロチャバネセセリの♂♀に類似する。また、ヒメキマダラセセリと誤認されることも少なくない。これらの3種は、翅の裏面が一様に橙色で、翅脈が細い黒線となる共通点があるので区別には注意する。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村、設楽町、旧稲武町黒田貯水池(現豊田市小田木町)、旧足助町大多賀(現豊田市大多賀町)から記録されている。

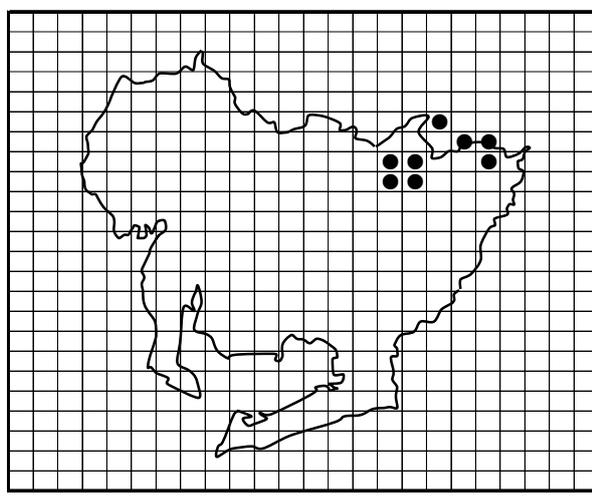
【国内の分布】

北海道南部、本州、四国西部、九州に分布し、産地は局所的。関東以西では山地に草原に限って発生する。近畿地方には大きな分布空白地がある。四国の産地は海岸に近く、例外的である。

【世界の分布】

朝鮮半島から中国にかけて分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

関東や中部地方、九州などでは、明るい山地草原に多く見られる。木曾、東濃、愛知県などでは、山間の明るい草地、林道脇にも発生するが、局所性が強い。敏捷に飛び、飛行中は見失いやすいが、ヒメジョオンやアザミ類など各種の草本の花を訪れ吸蜜するので、このときは目に付きやすい。年1回の発生。2004年～2014年、11年間における豊根村茶臼山付近での観察では、7月下旬から発生し8月中旬には姿を消す。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、本種は1週間ほど発生が遅い。枯れたヤマカモジグサ、ヒメノガリヤスなどのイネ科食草物に産卵し、孵化した幼虫はそのまま越冬、翌春から摂食し始め、初夏に蛹となる。愛知県では、卵や幼虫は発見されたことがない。

【現在の生息状況／減少の要因】

草地の管理放棄による植物遷移や過度な草刈りにより激減している。長野県でも、ホシチャバネセセリ、チャマダラセセリとともにもっとも減少が著しいセセリチョウである。草原が森林化した生息地では原因が明らかであるが、生息地の景観に大きな変化がみられなくても激減している。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、本種の減少が著しい。

【保全上の留意点】

原因が不明であり、保全の対策が立てがたい。草地の適切な保全、森林化の防止とともに、耕作地に近い産地では殺虫剤の散布に注意が必要である。

【特記事項】

近似種のヘリグロチャバネセセリの愛知県での採集記録は、1963年8月16日に旧稲武町下黒田と黒田ダムとの間という記録、および旧東加茂郡旭村(現豊田市)で1967年6月21日1♂採集、多数目撃という記録がある。ともに標本が現存せず、種々の観点から同定に疑義が残る。その後の調査でもヘリグロチャバネセセリは確認できないため、今回ヘリグロチャバネセセリは愛知県からの正確な記録がない種として扱った。

【参考文献】

高橋 昭, 1974. スジグロチャバネセセリとヘリグロチャバネセセリ. 一名古屋地方の分布とスジグロチャバネセセリの産卵と越冬態の観察. 佳香蝶, 26 (100): 69-72.  
吉田正樹, 1986. 黒田貯水池付近におけるセセリチョウ科6種の発生と訪花植物について. 佳香蝶, 38 (147): 41-46.

(2009年版を一部修正)